

れない。イギリスの人々のホリデイの過ごし方は、われわれのようにワサワサと走り見歩くのと大分違って、1～2週間同じところに滞在してパワーとしたり、その近辺を歩きまわることが多い。駅の構内には手押し車もふんだんにおいてあり、列車内も車両ごとに大きな荷物の専用置場がある。家族で動くのにさほど不自由はない。自転車でももち込むこともできる。こういった細かい配慮が旅を快適にしてくれる。そりゃ、現地で車があれば、便利には違いない。遠距離の旅には、同じ列車で目的地まで車を運んでくれるモートルレールのサービスもある。

9月に、国鉄からファミリー・レイルカード・サーベイと名うって、6ページ19項目にもわたる詳しいアンケート用紙が送られてきた。どんな旅に何人を使ったか、何曜に出て何曜にもどったか、レイルカードがあるから汽車を使ったのか、帰日も汽車か、やはり車でゆけば良かったと思うか、25マイル以上の旅をするときはレイルカードがなければ何を利用するか、カードを購入する気になった動機は、などとかなり対車を意識した質問事項が並べられている。

また、9月には家族旅行とは限定せず、夫婦、あるいは恋人用にと、大人1人分を払えば、もう1人は一率50ペンスという新たな切符も売り出された。これはカードもいらず手軽である。

省エネのソフト

日本でも旅が喧伝される。私なども中高生（大学生というより）に1人あるいは2人くらいで、寝袋でもか

編集後記▶最近やっと冬らしくなったものの、今冬は暖冬でかなりしのぎやすいようです。省エネルギーの面からみると、この暖かさは相当な貢献をしているようです。一方、国際情勢は中東地域を中心に一段と厳しい冬に向っているように思えます。▶エレクトロニクス技術の進歩や、資源問題などをめぐって、社会や産業の構造は大きく変革しつつあるといわれています。急速な革新

つぎながら安くて濃い旅をもっとたくさんしてほしいと思う。それにはいくら学割を使うとしても運賃が高すぎる。日本の国鉄の事情では、余裕のないこともわかるが、運賃の決め方には文化政策的な面からも多様性をもつてほしいと思う。

先日、私どもの学科の学生が、親睦をはかるとのこと、20人ほどで車に分乗し、往復1300kmの東北の秋を楽しんできた。車での旅は内輪の社会の移動でしかない、といくら嘯いたところで、日本ではこれが合理的なものでしかたがない。

イギリスでもこの程度の施策では下駄を脱がせるなど覚束なかるう。しかし何と大胆なやり口であることか。各駅には、車の混雑からのがれて、やっと海にたどりついた家族が、車をおぼり出して服のまま海に飛び込んでいるポスターを飾って、汽車でゆくほうが楽じゃないかと呼びかけている。“タダ”で走れる“自動車専用道路”モーター・ウェイの縦横に走るイギリスの道路は、日本に比べれば車が生き生きと走っている。やはり、と言おうか、夏の金曜の夕方はロンドンをのがれ出る車の列が延々と続く。

省エネも、ただひたすらに我慢をお願いするのではなく、利用者の立場にたつてとりつきやすい代替策もたてて、ふだんからそれとなく使っていたかくことのほうが大切ではなからうか。石油に代る新エネルギーの開発に最重点がおかれるべきではあるが、つぎのシステムに移行するためのソフトウェアにも、絶えず気を払うことが大切であると思われる。

をしている技術、他方で大きな革新を求められている技術とさまざまですが、技術開発をめぐってその評価と予測に関する問題は最近大いに話題になっており、本号の特集を企画しました。▶新しい表紙についての感想はいろいろですが、大方のご理解を得られたものと安心しています。気分を一新して今後は内容面でも一層の充実をはかる所存です。
(M)

オペレーションズ・リサーチ

昭和55年2月号 第25巻（新シリーズ第5巻）2号 通巻230号

代表者 小林 宏 治

発行所 社団法人 日本オペレーションズ・リサーチ学会
東京都文京区弥生2-4-16 学会センタービル
(電話 03-815-3351~2) ☎ 113

編集人 高橋 磐 郎

発売所 株式会社 日科技連出版社
東京都渋谷区千駄ヶ谷5-4-2 ☎ 151

本誌のご注文は直接

日本オペレーションズ・リサーチ学会へ

定価 650円（郵送料含）年間予約購読料 7200円（郵送料含）

本誌への広告お申し込みは日経弘報社（563-2241）、明報社（571-2548）へ